

『自発的隷従論』を読む

6月10日「この国はどこへ行こうとしているのか」2回目として、哲学者の西谷修さんのインタビューをレポートした。そこで16世紀フランスの人文学者、ラ・ボエシの『自発的隷従論』が紹介されていた。

戦争から戦後日本、そして現在の政治状況を考えるために、本書を手にとってみた。長い註をのぞくと、80ページ弱の訳書である。難解ではあるが、示唆に富む指摘が多い。とりあえず付箋を付けたところを書き写しておきたい。

「ここで私は、これほど多くの人、村、町、そして国が、しばしばただひとりの圧政者を耐え忍ぶなどということがありうるのはどのようなわけか、ということを理解したいだけである。その者の力は人々がみずから与えている力にほかならないのであり、その者が人々を害することができるのは、みなそれが好んで耐え忍んでいるからにほかならない。そ

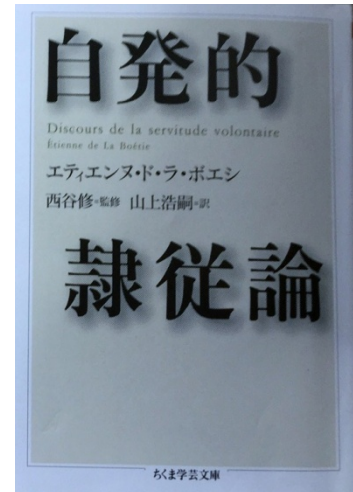
の者に反抗するよりも苦しめられることを望むのでないかぎり、その者は人々にいかなる悪をなすこともできないだろう。」 P11

「かくも卑劣な行いを少しでも感じたならば、獣たちでさえ決して耐えられないだろう。あなたがたは、わざわざそれから逃れようと努めずとも、ただ逃れたいと望むだけで、逃れることができるのだ。もう隷従はしないと決意せよ。するとあなたがたは自由の身だ。敵を突き飛ばせとか、振り落とせと言いたいのではない。ただこれ以上支えずにおけばよい。そうすればそいつがいまに、土台を奪われた巨象のごとく、みずからの重みによって崩落し、破滅するのが見られるだろう。」 P24

「信じられないことに、民衆は、隷従するやいなや、自由をあまりにも突然に、あまりにもはなはだしく忘却してしまうので、もはやふたたび目ざめてそれを取りもどすことなどできなくなってしまう。なにしろ、あたかも自由であるかのように、あまりにも自発的に隷従するので、見たところ彼らは、自由を失ったのではなく、隷従状態を勝ち得たのだ、とさえ言いたくなるほどである。」 P34-35

「人間においては、教育と習慣によって身につくあらゆることながら自然と化すのであって、生来のものといえ、もとのままの本性が命じるわずかなことしかないのだ、と。したがって、自発的隷従の第一の原因は、習慣である。だからこそ、どれほど手に負えないじゃじゃ馬も、はじめは轡を噛んでいても、そのうちその轡を楽しむようになる。少し前までは鞍をのせられたら暴れていたのに、いまや馬具で身を飾り、鎧をかぶってたいそう得意げで、偉そうにしているのだ。」 P43-44

「このような者たちは、明晰な理解力とものごとをはっきりと見通す精神をそなえて



おり、たいていの場合、粗野な俗衆のように自分の足もとにあるものだけを見て満足したりはしないのであって、自分のうしろも前もしっかりと見つめるものだ。つまり、過去のことがらを回想することによって、来たるべき時代のことがらを判断し、現在のことがらを検証するのである。彼らは、もともとすぐれた頭をもち、それを学問と知識によってさらに磨き上げたのだ。彼らは、たとえ自由が世界中から完全に失われたとしても、みずからの精神においてそれを想像し、感じとり、さらにはそれを味わうだろう。そして隷従は、いくら装飾されたものであったとしても、彼らにとってはいかなる魅力もないものとなる。」 P44-45

「人間が自発的に隷従する理由の第一は、生まれつき隷従していて、しかも隷従するようにしつけられているから、ということである。そして、このことからまた別の理由が導きだされる。それは、圧政者のもとでは、人々は臆病になりやすく、女々しくなりやすい、ということだ。」 P48

「こうして圧政者は、臣民を隷従させる際に、その一部の者をもって他の者を従える手段としている。圧政者は、みずからの身を守らねばならない相手—その相手に少しは見どころがあるとすればだが—によって守られている。圧政者は、いうなれば、木を割るのに同じ木でできた楔を用いるのだ。圧政者には弓兵、護衛隊、矛槍隊がいる。彼らはたしかに、ときには圧政者のせいで苦しむこともある。だが、神からも人からも見放され、捨てられたこの連中は、その悪に喜んで耐える。それとひきかえに、自分に悪をなす者に対してではなく、自分と同じようにひたすら耐える無力な者たちに対して、みずらも悪をなすのである。」 P69

(2015年6月21日)